

ひとつしかないのか

眼下はるか、上町線乗り場にびっしり重なりうごめいている黒い傘の群がりを見た。

屠所への通路のように、その群がりへ垂れさがる階段。

と、一しゅん大雨粒に叩かれて、黒い傘が大きく波立つ。

そのざわめきの、白いちらりとゆれたすき間からみえた―たしかにぼくの昨日が一せいに、そのとき―ぼくの今日を見上げてきたのだ。

II

深夜定期便

〈赤い鳥〉奇聞

怪談

夜景

同行四人

遺留証物報告書

張り込み捜査日録

深夜定期便

1

毎晩、12時ごろになると、「電話」がかかってくるのだ。

ふう子さんが「深夜定期便」と名付けた。

12日は、11時40分ごろ。

13日は、まよなかすぎの1時ちかく。

14日は、12時10分まえだった。

15日夜は、集会で帰りがおそくなったら

その代り？

16日の朝、6時。

だがこの「定期便」、なにも配達しない。

ノックのかわりにベルを鳴らすだけ。

2

で、ぼくはいつも、

きっかり10回ノックさせてから、

パツ、と受話器を把り上げる。

とたんに、電話がきれて……

だから、いつもきこえてくるのは、

ムウーンという、あのさびしい笛のサイン。

遠い国道を、逃げていく

黒い幌の小型車のように。

3

昨夜はぼくでなくて

ふう子さんが電話を把った。

「はい……もしもし——」

ところが、だまりこんだまま、電話が切れない。

「おいちゃん……」

「定期便が、戸口に立ってるで」

受話器を代ると、

かすかな身じろぎが伝わってきた。

ずうつと遠くで、小さく鳴っているラジオ。

それから何やらコト、コトンという音。

次に紙をめくる気配がして、

また、しいんとしずまりかえっての一分、二分……

とたんに、こらえかねた吐息が

どおつと、大風のようにとどろいてくる。

「やあ、ゴクローサン

夜食に、ラーメンでも届けよか」

すると、「あーっ」という男の悲鳴がきこえて

がちゃんと切れて、そのまま……

4

いまは、1時10分すぎ。

今日の通信物の整理を終って、

ちよつと、崖の上の楠の木にかかっているお月サンを見に出ようかな、

など思いながら、

なんとなく待っている。

タバコをとりだす……

マッチはどこ。

立上ろうとしたとたん、

来た！「定期便」！！

ベルが鳴る。三回、四回、五回……

今夜はエライおそかったなあ。

ふう子さんは、もう寝てしもたヨ。

〈赤い鳥〉奇聞

1

ま夜中に帰ってきた。

「うわあ、おいちゃん、これ、なに」

さきに立ったふう子さんが、〈サルートン〉の入口で、声をあげる。

門灯をつけると、足もとまで、

まっ赤にペンキがとびちっている。

「あつ、こもや、おいちゃん」

玄関よこの壁に、ばあつとぶつつけたペンキが、

赤い羽をひろげた大きい鳥のかたちになって

羽先きのしづくが、まだぬれていて、うごく。

「エラいこと、しよるなあ」

「いったい誰や」

みまわすと、あたりはどこも、灯をけしたまっくらがり。

息をつまらせて、しいんと、どこかでこちらを見ている気配。

2

S君が訪ねてきた。

「すぐ、ここ判った？」

「玄関の赤ペンキが目印しや、と教えてもらたんて…」

それから急に改まって

「そやけど、用心せなああきませんでエ……」

「Uさんと、Nさんところにも、この赤ペンキがついてる、て聞き

ましてん」

「ナンかコトがおこつたら、暴動やとか地震とかでも、まず第一番にヤラレル目じるしや、云うてまっせ」

「えー、ホンマかいな。…」

とは云つたものの、冗談ではあれへん。
さつそくふう子さんと、タワシでゴシゴシ、
が、セメントのデコボコ化粧壁、とても落ちるもんやない。
しゃーないから、ずっと、そのまま。

3

ちよつと一ぱい（カマ）でのもんで
ぶらぶら、旭町通りをのぼつてきた。

と、道端に、新聞をひろげて、坐っている。

その前に、ペンキ缶が二つだけ。

—どこかでクスネてきた（売りもん）やな—
横目でとおりすぎようとしたとたん、低い声で

「おいちゃん」

エッ、とふりかえると

「どや、買うとき！ いるやろ？」

目深かに鳥打帽でかくしていた顔をあけて
ニヤリ、ふう子さんそっくりが、片目をつぶつてみせた。

4

「えー」

「しつ、ほら、（アリババと四〇人の盗賊）や。」

「戸口に、しるしつけてまわつた作戦、知ってるやろ」

それから、急に大声でパンと手をたたいて

「よっしゃ。まけとくでエ、この地図もサービスして、たったの千
円！」

ぱつとひろげた地図の巻軸がころがる。

ころがりながら、足許からずんずん伸びていく。

「はよ、足のせんかア」

「ウワ、魔法のじゅうたんや」

ふわあつと宙にうかんで、動き出した地図に、あわててとびのると、

—あ、もうここは新世界市場の真上。
ずんずん、遠くなっていく通天閣。

5

「さあ、ここが関経連のH、徴兵制がいるというた奴のとこや」

「ほら、大阪拘留所の看守長のワル、Kの官舎やで」

ペンキ缶にハケをつつこんで、ぱつと一と振りする。

とたんに、赤い鳥がぱあつと飛び立っていく。

門柱や塀や玄関の壁に、ぱつ、ぱつとはりつく。

「地図のしるし見落さんといてや。ここ関電労組のダラ幹委員長T
のうち。エエとこに住んどるわー」

「△印は町内会長やらの小ボス連中やけど、これも軒なみ、片っぱ
しにやつとこか」

まわり灯籠みたいに、町並みがぐるぐるまわりながら走っていく。

「もうそろそろ、これでエエやる。ペンキも空になったし…」

「みてみい、地図にも赤い鳥がいつぱいや」

6

急にあたりがざわざわして

きいろい夕日が、一めんにてらします。

まわりをみまわすと、

勤め帰りの人たちがしきりに行き交う、阿倍野橋の大陸橋のまんなかで

人波にもまれながら、ぼくひとり

空のペンキ缶をぶらさげて立っている。

どこかで、しきりにふう子さんの呼び声。

「おいちゃん…なにしてるの、」

「むかえにきたんよ、おいちゃん…」

—ああ、夕日の通天閣が、きれいや—

怪談

この窓から見上げるとちようどま向いの楠木荘アパートの、いつもカーテンがしまっている、あの二階の部屋。

その窓ガラスが一と枠だけ割れていて、ポスターが貼ってある。ほら、色はげた山口モモエが小首をかしげてる、あそこ。

あれ、去年の夏からずっとあのまま

さむい冬のびゅうびゅう風が吹く夜も

なんでか、ほったらかしやった。

× × ×

四・五日前の夜中

集会がおそくなつて、ふう子さんと二人もう午前一時すぎてたやろか。

石段をあがってくる

楠の木の梢の上に、赤く丸い月

「おいちゃん、十五夜やア」

見上げた拍子に、二階のあのモモエの顔あたり、

カーテンがちらつと黒くゆれた気がした。

「あ」と見直したら

もう、しいんとまっくらな部屋、

たしかに、あの部屋

それまで、電気がついてた気がするのに。

× × ×

ひるま、ずっと部屋にこもって原稿かいていた。すると、どこかで

ペタ、ペタつとかすかな音がする。

人気もない午後二時すぎ

この行きどまりの路地でいったい…と、
表へ出てみまわしたら

あの二階の窓にはつてあるポスターの
モモエの顔のあたりが

ほら、ちよつと破けて、四角くのぞき穴みたいになつてるやろ

あののぞき穴のフタみたいな破れ紙が
ペタ、ペタ、風のたびにしてるんや

窓が開いてるのなんかみたことがないあの部屋
一体、誰がいるんやろか。

夜景

午前三時半

もうみんな、順々に寝てしまつて、

ぼくの、きょう一日の終り。

紙袋いっぱいにつめた、「イオム通信」を出しに行く。

右手は、ずうつと長屋風の低い軒のくらさ

左側は、日本写真学校のつきはぎコンクリートの裏塀

ふりかえると、くらい行き止まり路地の奥で

ばあつと光を流している窓がぼくの部屋

そこから、透すかして見通せる表通りまで

谷間みたいに細長い百メートルほどの小路

出口のところにひよろりとした電柱が一本

それに取付けられた古風な外灯が、丸い輪を地面におとす
その光のなかに、自転車一台。
電柱の支えにくくりつけられて
無雑作に、おきっぱなしになっている。

自転車……

そうや、今日ひるま

区役所へいったかえり

「あつ、忘れもん」とUターンしたとたん

うしろから走ってきた自転車が

はっ、ととまって

それから、はげしくペダルを漕いで、

逃げるように、追いこしていった

茶色ジャンパーの

あいつは、

たしかに……

トンネルを抜け出たような

夜空が一べんにひろがる、表通り

道の両側に、うずくまっている

いくつもの黒い大きな影の、自動車。

いつまでもうごかない、軒下の、

あのぼんやりした影は、植木棚とごみ箱

遠くへと街灯がづらなつて、

通りへ出てくる小路のくらがりを

あわあわと照らし出している。

ねしずまっているタバコやの戸締りは

四角くロープをかけて

まるで、固く荷造りしたようだ。

その店先きの赤いポスト

どこにも人影がない。

そうや、やっぱし、あのとき

まるで一ぺんもふりむかず

左右に大きく後姿をゆすって

閑散なまひるの阿倍野交叉点を、

みるみる小さく

一目さんに渡っていった

あの大男の、あいつは……

たしかに……

手紙を束にして入れる。

ポストのフタが、ガチャーンと大きく鳴る
入れるたびに

ガチャーン、ガチャーン、ガチャーン

だんだん大きく、はげしく

まわりの夜気がしだいに鳴ってくる。

同行四人

1

北陸鉄道の始発駅「野町」は
バスの待合所みたいで、ひなびていた。

「白山下ユキ」とかいいた木札の下を通り抜けると
家の裏手の軒先にくつついて

一輛電車が、お客をまっていた。
朝、九時三分発

時間きつちり、まだ少年顔の車掌が

とびのつてきたとたんに

ゴトゴトンと揺れて、電車が動き出す。

ベルも何も鳴らさんで――

2

チンチン鳴ってる踏み切りをすぎて

すぐ電車は冬ざれの田んぼの中

盛り土しただけの野っ原の駅。

停るたびに二人三人降りて、

車内が、丸ごと透けていく。

「おいちゃん、さつき発車まぎわに飛び込んできたあれ、一番前に

坐って、ずっと顔そむけてる、あのメガネの、あれ……」

「うん、そやなと思ってたんや、ちぢれ毛のメガネ。あれやっぱしお

ナジミサンやで」

「ほんまに、ちがいないわ。イヤヤなあ」

3

昨日はIさんの家に泊った

「明日一日あいてるさかい、一ぺん加賀白山の冬景色みにいこか。」

日帰りで行き当りばったり……」
ふう子さんが地図をひらいた。

「エ工名前や、北陸鉄道・鶴来温泉・白山比咩（ひめ）神社・手取
溪谷、仏師ヶ野、中宮……」

あさ八時起床、野町までは車で送ってもらった。

「そやけど、ぜんぜん気がつかなんだなあ」

—大阪エキでは、階段を駆けのぼって、とびのつたしゅん間、ドア
がしまったのに、

—ほんまにどうやって尾けてきたんやろ。ミステリーや。

電車は、いま「加賀一の宮」を出たところ

いつの間にか、行手の山はかき消えて、鉛色の空一面の雨霧、
いまにも降ってきそうな。

4

「あんた、ひとりかいな」

「大阪から、ずっと尾けてきたんか」

「知ってはったんか。寒うて寒うて……」

着のみ着のまま、薄い背広のエリをたてる。

「何処まで行きはりますねん」

「行き先なんて、知るかいな」

「ま、そんなこと言わんと、連れてつておくなはれ」

終点、「白山下」は、しぶくような氷雨の中。

三方が山、一方が深い谷の瀬音。

道が一本、すぐ曲ってみえなくなつて

あたりは人家もない「無人駅」

橋のたもとにバスが停つて

「一里野温泉行き」。10分後に発車。

どうしようか。

はげしい雨にとり囲まれて、三人だけ。

バス賃四百円。高い雨やどりやけど、行くあてもない。乗り込むと、

あわてたように、「メガネ」ものつてくる。

十一時発車

ところで！

バスが動き出したとたん

前方から、ゴルフ帽の若い男が

全力疾走で現われて、とびのる。

ナント、ナント、みれば！

これがまたまた、おナジミさんやんか！

体中で息をきらせながら、顔をそむけて、後ろの席へ行こうとする。

「おいおい、もうバレてるのや。仲よう連れてつてもらお」

「アカン云うても、ついてくるクセに」

「な、おいちゃんにもよろしゅう頼んでえな。ふうちゃん」

「心安う、名前呼んでイランワイ」

「いったいあんた、どこから出てきたんや」

6

次第に雪になっていく雨

窓の景色がぐるぐる変る。

「ゴルフ帽」が、あちこちつかまりながら、やってくる

「おセンベ、どうですか」

「イラン、きらいや」

「そんなこと云わんと、ま帰るまで一しよに……」

「せっかく、うちのラブラブデーが台なしや」

とつぜん、車体がガガーッと傾むく。

スリップした車輛が、軋んで悲鳴をあげる。

運転台の視野が、崖つぶちから空へ、ぐるうつと旋回して停る。

座席から飛び出さなかったのは、運転手だけ。

「アブナかったなあ」

「ビックリするわ、もう」

〈同行四人、加賀白山山中、二百メートルの断崖へてん落〉

—なんてことになったら、新聞や週刊誌は、なんとかくやろか。

ふと気付くと、「メガネ」の声

「ふうちゃん！ こっち側の窓、滝が見えまつせえ」

窓ガラスのくもりを拭きながらの大サーブス。

「遺留証拠物」報告書

前夜からウリ事務所に泊ったAさんらが、

朝五時の一番電車で、堺刑務所へ出かけていった。

ぼくは、連絡電話待ちの留守番役。

いつまでも薄暗くて、夜が明けないなあ、と思つてたら、

雨がひっそりと降り出している。

十月一日、山田契二さんの満期出獄の日。

× × ×

十一時すこしまえ。

石段下の遠くから、人声と、たくさんの足音がする。

窓から首をつき出すと、

先頭の数人を取り囲むように、

ひとかたまりになつた一団が、一せいに昇ってくる。
Bさんの大声が、もう、玄関廊下あたりで聞えて――

× × ×

それから、ずうつと五〜六時間。

向いのアパートの軒の下。

大きな二本のクスノ木の幹の裏側。

石段下の路地の角。

写真学校裏塀が出っぱつた空地に、

一人、二人、三人……あわせて、なんと二十一人も――

終日、ふりつづける雨の中。

足ぶみしてたり、ささやいてたり、

傘をさして、ずうつと男たちが立っていた。

× × ×

午後五時まえ。

今夜の青森ユキ夜行にのるとかで、

山田契二さんが、玄関から顔をだすと、

とたんにまわりも動きだして、大さわぎ。

五メートルほどはなれて、ざわだわついでいく。

そしてフロ屋の曲り角のところまで

忽然と消えて、それっきり。

――まるで、さつきまでがユメみたいに。

× × ×

ふりかえると、もう夕暮。

石段の横あたり、雨にぬれながら、

ふう子さんが何かを拾いあげては、

クズ袋にほうり込んでいる。

「お客さんの忘れもんや、おいちゃん」

みれば、あの男たちが捨てていった、缶ビールとジュースの、

ピカピカの空き缶が、
うわあーつとばかり、十五、十六個、足許にちらばって、
いつまでも、ユメとウツツの境界で暮れのこっているような――
そこだけの、雑草の中。

張り込み捜査日録

① 五月十二日午後11時。前任から引継いでK荘二階21号室での張り込み開始。

② 午前2時。向井(M)はまだ起きている。路地のくらがりの一
角がぼおつと明るく、つるバラの黄の大輪が一せいに咲いている。
そこがMの部屋の張出し窓である。時々室内で影がうごき、物音
がする。Mはまだ起きている。

③ 午前4時30分。Mが窓から顔を出す。明るんできた空をのぞく。
と、玄関からステテコ姿でたばこをくゆらせながら、崖上の路上
で、ひわいな体操のみぶり数分。石段から新聞配達が駆けのぼっ

てくるのに、狼狽して部屋へ。

④ 午前6時。就寝か。

⑤ 午前11時20分。電話のベルしきり。ようやくM応答。「原稿はできた。速達で送る、云々」

⑥ 午後1時すぎ。灰色縞柄の仕事着、M、出てくる。石段を降りず、長屋の路地をぬけて阿倍野筋へ。タバコや角のポストに速達便投函後タバコ二つ購入。銘柄は「エコ」。

⑦ M、電車通りで信号無視。つききって「第一勧銀阿倍野支店」へ入り、約一分後姿を現わす。(マッチ貰ううけのためと確認)

⑧ ついでユーゴー書店内一巡、立読み等、約三〇分。(万引的挙動なし)

⑨ 午後2時。M、書店を出て、天王寺駅方向へぶらぶら歩く。往來多く、近鉄デパート裏口あたりで、突然Mの姿なし。

店内一階をさがすが見当らず。地下売場降り口を駆け降りた。たんにMのうしろ姿にぶつかりそうになる。あやうく横を通りすぎる。

M、贈答品売場で注文したらしく、店員より伝票らしきもの受取るのをべっ見。

⑩ M、ワインの試飲売場へ移動。その間に先刻の売場へ戻って女店員に尋問

「さっきの男、ここで何を注文したんや」

「伝票の控えみせてんか」

「ケイサツや、はよせんかい」

「ナニをぐすぐす云うとうねん」

「あいつスリや、いま尾行中なんや」

「お前じゃわからん、主任よべ」

「あつ、野郎、おらん、逃げた」

「ちく生、おまえのせいやぞ」

⑪ 後刻、この女店員については、次のことが判明

イ、女店員はNマネキンより派遣された臨時アルバイトのM・F子。Fは偶然にもMのグループメンバーで、かねてからマークされている活動家

ロ、Mが売場に近寄ったのは、F子から印刷物を受取るため、

注文等のことなし。(目撃した店員の証言)

⑫ 見失なったMを求めて、地下売場を縦横に走るも、遂に見当らず。

各階売場、特に催場・食堂・屋上遊園捜査するも、姿なし。天王寺駅、地下街なども一巡、その間M宅に電話、在否をたしかめるも、応答なし。

⑬ 午後4時。M宅に戻ることにし、旭町商店街の坂道を下る。

のみや、ポルノ映画館、パチンコと、なんとパチンコやのなかから、Mが出てくる。

右下りのくせのある肩、何も持たぬ両手。

数メートル先をひよこひよこ歩いていく。

道を曲るときの放心した横顔が、西日の逆光の中で、急に老けてみえる。(パチンコは大負けしたらしい)

⑭ 午後5時、M、部屋の中に入ったまま、変化なし。次番と交替。

Ⅲ

表白文

一日―反原発10月行動月間―

ピラについて

〈泰山鳴動ラット作戦記〉

〈J22・対関電交渉要領〉並びに補遺